

# 現代敬語の成立過程

— 中世から現代に亘る敬語の変遷 —

宮 崎 喜 美 子

## 前 書 き

この研究のきっかけとなったのは、短大一年の時「敬語史論考」の演習で、敬語についての興味を覚え、いよいよ卒業研究に取りかかるに当って、敬語の歴史の勉強を發展させてみようと思ひ立つてこのテーマを選んだ。

## 一、研究計画

資料として次のものを選んだ。

- 1、御伽草子「ものくさ太郎」 中世末期成立
- 2、天草本平家物語 一六〇三年成立
- 3、狂言 中世末―近世にかけて成立
- 4、東海道四谷怪談 近世末期成立

右のように資料を選んだのは、現代口語の母体となる文献は、中世中、末期から現われると言われていることによっている。また、「御伽草子」は、中世文学の演習資料として既に読んで

いるという理由からで、この草子は、いわゆる文語文体の作品であるが、この文体での敬語を調べることも、その変遷を見るために必要と考えたからである。

「天草本平家物語」と「狂言」は、中世末期の口語文体の作品として、そこに現れる敬語をとらえようとして取りあげたものである。

近世では、その後期の作品を取りあげて、現代敬語の体系が成立する経過を見ようとした。

## 二、中世における「候ふ」の語義

「候ふ」という語は、平安時代には、「あり（在り）」の謙讓語として、身分の高い人や自分の主人等の傍らに謹んで控える「伺候する」という意味であった。つまり貴人、主人に「侍う人」という意味で、この「さぶらふ人」というのは、「さむらふ人」「侍」と一連のことばなのである。ともかくその「さぶらふ」は、やがて「あり（在り）」の丁寧語として次のように用

いられてきた。

『いかなる所にかこの木はさぶらひけむ』

。どういふ所にこの木はございますのでしうか

(竹取物語の用例)

つまり、ここでは「さぶらふ」が「あります」「ございます」という意味で使われているのである。

また、補助動詞・助動詞として、動詞・動詞型活用 of 助動詞について、丁寧の意を表わすものとしても使われていた。

その用法

(一)、貴人のおそばに控える、伺候する

『殿上の小庭に畏まってぞ候ひける』(平家物語)

伺候する相手をうやまつて言う謙讓語『畏まつておそばに居る』

(二)、話し方を丁寧にし、自分の品位を保つために用いる丁寧語『あります、ございます、おります』

『天晴 その馬は、おとといまで候ひしものを』

。一昨日まではおりましたのに (平家物語)

『しかじかの宮のおはします此にて御仏事などさぶらふにや』

。御仏事などありますのでしうか (徒然草)

「…ております」 補助動詞として助詞などに付く

(三)、(1)補助動詞として丁寧に表現する

助詞などに付いて用いる「…でございます」

『前なる人ども誠にさこそ候いけれ。尤もおろかに候』<sup>①</sup>

① そうゆうことでございます。

② おろかでございます。 (徒然草)

(2) 動詞に付いて、助動詞として用いる。「ます」

『歌も懐かしななんと承り候』 (史記抄)

(3) 敬語の補助動詞・助動詞などに続いて「おいでになる」などの丁寧な気持ちを表す。

『いかにかうは、うちとけて、わたらせ給ひ候ぞ』

(謡曲・松風)

(4) 「…て候へ」の形で希望の意を表す。「…て下さい(ませ)」

『覚えて候へ』

(四)、打ち消しの助動詞「ず」に続いて「…でございません」の意味を表すもの

『地をほしからず候』

。ほしくはございませぬ (御伽草子)

「候」の丁寧語としてのこの用法は、別に記すように「侍り」とせり合うように使われることになったが、用法の語感としては「侍り」よりも改まったものがあるので、次第に「候」が優位となり、「侍り」を圧倒して、鎌倉時代以後になるともっぱら「候」が使われるようになり、次第に多くの用法が見られるようになり、中世敬語の花形とも言うべき言葉となった。

そのような事実を、『御伽草子』の「物くさ太郎」によって詳しく調べてみたが、本稿では省略せざるを得ない。

### 三、天草本平家物語の敬語

この文献は、中世末、キリスト教布教のために、日本に渡来した宣教師が、当時の九州地方（天草半島）で語られている日本語（口語）で、その頃、人々に語り伝えられていた平家物語を書き写したものである。したがって、当時の口語を研究するには、最も良い資料である。

次に掲げるのは、『鬼界ヶ島の流人を許さるるについて、後に残らるる俊寛の悲しみ深いこと』を中心として、その敬語を取り出したものである。

- ① お語りあれ
- ② 悩ませられた
- ③ 中宮の悩ませらるる御祈にも
- ④ 人の願いを叶へさせられば
- ⑤ 御祈りさまさまにござるとも
- ⑥ いかでかござろうぞ
- ⑦ 栄華もいよく盛んにござろうずると申されたれば
- ⑧ 誠にさこそござるらう
- ⑨ おの／＼のことにござった程こそ
- ⑩ 袖を絞らぬはござなかつたと申す
- ⑪ 袖をぬらされた

⑫ 父の事を恋しげに仰せられた

⑬ 都のお使いも叶ふまいと申さるる上

右に取りだした各語について少し補説しておこう。

① お語りあれ

この「お：あれ」という型の尊敬表現は、中世後期から文献に表われるようになったもので、現在でも、例えば、長野県北信地方に次のようにつかわれている。

「お：やる」「やる」

室町時代から江戸時代前期にかけて

。なぜにそなたは力をお添えやらぬぞ

（天草本伊曾保）

。間に合ふてだましやれば

（心中宵庚申）

などと用いられて、敬意を表わす語であった。それが、

信州でも広く使われたらしく、北信地方では、現在も老人層ではこの語を用いて、

。向こうのおっしやんがおでやった（おいでなされた）

「連用形」（更埴地方）

。あそこへお行きやる

「終止形」（更埴地方）

。早くおだれ（おでやれ）「命令形」

のように言われている。……（信州方言読本）

② 悩ませられた

### ③ 悩ませらるる

### ④ 叶えさせられば

この「せられ」は、元、せられという二語が熟合して一語になったもので、「せ」は、使役型の尊敬助動詞であり、「られ」は、やはり、尊敬の助動詞であるから、「せられ」という形になって、尊敬度は、ずっと高いものになっている。この作品の中でも、「る」「らる」の単独型助動詞と、「せらる」という複合型助動詞の二類がつかわれているが、それぞれに尊敬度の違うものであることが注意される。

### ⑤ 御祈りさまざまにござるとも

### ⑥ いかでござろうぞ

### ⑦ いよいよさかんにござらうずると

### ⑧ さこそござるらう

右に掲げた「ござる」は、独立動詞、および、補助動詞に分けられるものだが、いずれも、丁寧の気持ちを表わすものとして、中世期から江戸前期にかけて、「ござる文体」といってよいほどの表現形式を成立させたものである。

### ⑩ 袖を絞らぬは、ござなかつたと申す

この「ござなかつた」という形は、形容詞「ござなし」という活用形が成立していたことを示すもので、語法上注意すべき形である。

### ⑪ 袖をぬらされた

この「れ」は、尊敬の助動詞「る」の連用形であるが、「袖

をおぬらしになった」という意味を表す。現代語の「袖をぬらされた」という言い方とまったく同じ形であることがおもしろい。

。その他

「仰す」「申す」「思召す」などの尊敬語又、丁寧語などが多用されており、また、現代語の敬語と同じ語がみられることも注意したいところである。

## 四、狂言の敬語 — 靉猿 —

狂言は、中世十六世紀から十八世紀にわたる長い間に発生した演劇の台本であるが、その書写年代は、諸流によってかなりの違いがあることが指摘されている。

この研究に使用した文献は、日本古典文学全集本であって、これは、十八世紀末の書写本である。したがって、江戸時代前期の言葉が、混入しているものとあつかうべきものであるといわれている。

### ① 「お…やる」

これは、天草本平家物語の①にある「お…ある」が、変形したものである。

。お見やる通り

。お貸しやればよいに

②「…です」

これは、この期に初めて現れた助動詞で、それが現代では、「です言葉」としてかけがえのない丁寧語となっているものである。

。遠くに隠れもない大名です

③「せられ」

天草本平家物語②でとりあげた助動詞であるが、これも、狂言には、非常に多く使われている。

。こなたもよう思うてもみさせられい  
。射てとらせられう

④「ござる」

天草本平家物語の⑤⑧であつたものであるが、ここでは、「ござります」という連語の形も多く現われている。

。心が屈して悪しうござるによつて

。それは一段とようござりませう

⑤「ます」

「まする」という形と「ます」という形が、併立して使われていることが注意すべきことである。

。致します

。申し上げます

⑥「なさる」

これは、「なされて下され」「なさるる」によってわかるように、「なさるる」という連体形をもつ活用語であることがわかるが、「お：なさる」という形も多く現われるので、現代語の「お：なさる」の原形が、この頃生まれたのではないかと思われる。

。猿の命はお助けなさる。

。お詫びをなされて下されい。

⑦「おりやる」「おりない」という特別な丁寧語も使われている。

。過分におりやる。

⑧「下さる」

この語の命令形は次のようである。

。伺うて下され

。なされて下され

つまり、この語は、命令形に「：れ」という形をとっているところが、現代語の場合と違うのである。

⑨「仰せ」「思召し」「なんと召さる」などの尊敬語が使われている。

⑩「申す」「致す」「参る」「伺う」「存ずる」「承まわる」の諸語が、丁寧語又は、慇懃体としてつかわれる。

## 五、近世後期の敬語

近世後期の敬語を調べる資料として、戯作者鶴谷南北によつ

て書かれた歌舞伎の台本、『東海道四谷怪談』（一八二五年以前に成立）を取りあげた。

それは、この歌舞伎の台本が、その文学ジャンルによる特色として、登場人物の生活語による対話・会話によって進められているわけであるから、いわゆる古典文法文章による作品のよ  
うな、伝統的、又擬古文的なものでなく、この著作年代のこと  
ばの生の姿をとらえられるからである。

## 六、東海道四谷怪談の敬語

この作品の初めの部分五ページから、敬語を文、又は文節の  
形でとりだしてみたものが次の二十二例である。（掲載省略）  
右に抄出した敬語の用法を見ると、次のことがわかる。

現代語は、「ますことば」と言われるほどに助動詞「ます」  
が文章の叙述に多く現れ、また、それが教養ある丁寧体の代表  
となっているが、その「ます」の用法は、

- |                 |           |
|-----------------|-----------|
| ① だいぶおかわきなされますナ | （終止形）     |
| ② お気に入りまし       | （連用形）     |
| ③ お出でなされまし      | （命令形）     |
| ④ 思し召しませうと存じまして | （未然形・連用形） |
| ⑤ お気に入りましとお人形でも | （連体形）     |
| ⑥ 畏りました         | （連用形）     |

のように六文に使われており、その用法は、全く現代の用法と

同じであることが、まず注意をひく。とりわけ、「④」の文は、「ませ・まし」というように、二つの「ます」が使われた丁寧体であること、また、「⑤」の文には、現代語に多用される、連用形の「ます」が使われるなど、江戸時代前期にはなかった用法が見られるのはたいへん重要なことであると思う。つまり、助動詞「ます」は、

参らする↓参らする↓まする↓ます

という変化を経たものと言われており、この「ます」という語形は、江戸時代前期には、『狂言』に現れていることはわかっているが上に記した連体形の用法が、この作品に見出せるのは、「ます」の活用履歴として重要なことと思われる。

次に、男の発言には、「まする」という形が根強く使われていることがわかる。そして「まする」がやや慇懃な調子の言葉として人々に意識されていて、男性、特に侍階層がなお、その「まする」を使っていることがわかる。

次に、現代語の尊敬法の「なさる」の連用形が「なされ」として使われていること、つまり「なされ」↓「なさい」という音便形がまだ起っていないということである。

これと同じような現象が「ござります」という丁寧語である。これは、

ございますれど↓ございますけれど  
さようでござりまする↓さようでございます

のように、やがて「ございます」となっていく前段階のもの

ということがわかる。(後略)

## 後書き

中世期から江戸時代後期の作品を中心に進めてきたが、中世期に、すでに使われなくなった語、又は、用法などがあり、国

語史全体の研究にすると、もっとくわしくできたと思う。しかし、中世期から江戸時代までの約、三五〇年の間に、敬語に限らず、多くの言葉が、少しずつ変わり、今、現在私達の使っている言葉になる過程が、一部ではあるが、わかったのは、よかったと思う。又、研究を進めていて、おもしろかった。

## 敬語の基本諸語の系譜対照表

お伽草子 (一五七〇年成立)	天草本平家物語 (一六〇二)	狂言の敬語 (近世前期)	東海道四谷怪談 (一八〇九)	現代語
①／	①お…ある ・お語りあれ	①お…やる ・お見やる通り ・お貸しやればよ に	①／	①お…やる (方言として北信各地に使われる)
②／	②なさる ・申しなさるること	②なさる ・猿の命はお助けなさる ・お詫びをなされ て下され	②なさる ・おかわきなされ ます ・お出でなされ ました	②なさる ・おかわきな います ・お出でな さい ました
③侍る ・あります、ございま すの意を表わす場合	③ござる ・栄華もいよいよ 盛んにござらう	③ござる ・一段とようござ りませう	③ござる、ござります ・心得てござる ・肝要でござりま	③ございます ・お出でな さい ました

<p>注 この対照表は、現代敬語の基本となつてゐる各語の系譜を見るために研究資料に即して示したものである。</p>	<p>の用法に次のものがある</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・不思議の男一人侍りける</li> <li>・めでたく侍りける</li> </ul> <p>候ふ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ここに候ふもの</li> </ul> <p>候ふ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ここに候ふもの</li> </ul>
<p>⑥／</p> <p>⑤／</p>	<p>④</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・まらする</li> <li>・変わつて見えまらする</li> </ul> <p>④</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・まらする、ます</li> <li>・申し上げます</li> <li>・致します</li> </ul>
<p>⑥</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・下さる</li> <li>・伺うて下されい</li> <li>・なされて下されい</li> </ul>	<p>⑤</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・遠くに隠れもない大名です</li> </ul> <p>⑤</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・です</li> </ul>
<p>⑥</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・下さる</li> <li>・聞いて下さい</li> </ul>	<p>④</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・す</li> <li>・申しあげます</li> <li>・でござりませう</li> </ul> <p>④</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・だいぶおかわきなされませう</li> <li>・思召しませうと存じまして</li> <li>・お気に入りでしたお人形でも</li> </ul> <p>⑤</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・(です)</li> </ul> <p>⑤</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・です</li> </ul>
<p>⑥</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・下さる</li> </ul>	<p>④</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ます</li> </ul>

現代敬語の代表的な諸語